



第104代土木学会会長 田代 民治

【聞き手】 舘石和雄 土木学会誌編集委員長

インフラの重要性和 それを支える現場に目を向けた 学会活動を推進

ダムを中心に

現場ひと筋30年。学会では岩盤力学分野で活動

—— 会長就任おめでとうございます。

まず、これまでの経歴や土木学会との

関わりについてお聞かせください。

田代——私は鹿島建設に入社して間もなく、栃木の鬼怒川上流にある川治ダムの現場へ配属されました。間に中央高速の恵那山トンネルの現場を挟んで、佐賀の厳木ダム、神奈川の宮ヶ瀬ダム、広島の温井ダムと、およそ30年間、現場ひと筋に仕事をしてきました。

温井ダムの高さは、アーチダムとしては黒部ダムに次ぐ日本2位、川治は4位。重力式コンクリートダムの宮ヶ瀬は、堤体積で日本一の大きさです。例えば、大きな現場ばかりを経験させてもらいました。その後は東京支店土木部長から東京土木支店長になり、土

木管理本部長を経て現在に至っています。

ダムの工事に携わっていた期間が長いので、土木学会では岩盤力学委員会のダム小委員会で10年以上活動しました。

若い人に伝えたい
自然と向き合う
ものづくりの醍醐味

—— 土木の仕事の魅力について、どのようにお考えですか。

田代——私がこの世界に飛び込んだのは、机上で学ぶ知識に頼るだけでなく、現場で体を動かしながら行う土木のものづくりが自分に向いていると思ったからです。映画『黒部の太陽』に憧れた面もありました(笑)。

しかし私は、その現場で、まさに土木工学の難しさ、奥深さを知ることになりました。土木は他のものづくりと違い、何もない空間にポンと

構造物をつくるわけではありません。そこに必ず立ち現れるのが、自然の脅威です。「克服する」などと言うのはおこがましい。自然と対峙しながら、その威力を推定し、何とか調和する道筋を考える——。

つまり、自然環境を的確にとらえなければものづくりができないのが、土木の世界なのです。非常に困難ではありますが、あえて挑戦していくことがやりがいに通じる。それこそが、他学にない土木の最大の魅力でしょう。

災害列島と言われる日本の国土を守り、人びとが安心して安全に暮らせる社会インフラをつくる意義は大変に大きい。自然と向き合い、うまく収められたときの達成感を若い人にもぜひ味わってほしいと思います。

現場のあり方を
検討する直轄タスク
フォースを始動



[日 時] 2016年6月13日(月)
土木学会役員会議室にて

——会長として重点的に取り組ま
ないことについて、方針をお聞かせくだ
さい。

田代——まずは、若い人たちに受け
継ぐべき生産現場のあり方を検討し、
現場従事者の増加を生む改善へ向け
た対策を強化していきたい。長年現場
を歩いてきた私のような者が会長に
選ばれたのも、「現場にも目を向けて
いこう」との思いが学会内に広がって
いるからではないかと感じています。
すでに、今年4月から「現場イノ
ベーションプロジェクト」次世代に
繋ぐ生産現場のあり方」と題する会
長特別タスクフォースを始動させま
した。ここでは「コンクリート工の生
産性と安全性の向上」、「IT化とロ
ボット化」、「建設産業の担い手確保」
の三つのテーマを検討していきます。
ご存知のとおり、土木学会は「昨年
に創立100周年を迎え、「あらゆる
境界をひらき、持続可能な社会の礎を
築く」という100年ビジョンを打ち
出しました。他分野と数多くの接点を
持つことは、総合工学である土木の本
質です。狭い殻に閉じこもらず、周辺
分野と連携し、外部の人たちにどんど
ん入ってきてもらうことが重要。タス

クフォースの活動が、そのきっかけに
なればと思います。

「健康診断書」で インフラの重要性への 認識と理解を促す

——土木学会誌の果たすべき役割に
ついてご教示いただけますか。

田代——学会誌に期待したいのも、
やはり「境界をひらく」ための役割で
す。たとえば、現場の実態を伝えたり、
女性や若い人たちの考えを積極的に
取り上げたりすることです。海外や他
産業の動向も知らせてほしい。また、
学会誌にとどまらず広報活動全般で、
インフラの重要性を社会へ発信して
いくことが大切です。

先ごろ、当学会は「インフラ健康診
断書」を発表しました(本号4～5頁
参照)。これは、現状の社会インフラ
の健全度を第三者機関の目で独自に
評価し、結果を一般社会へ向けて公表
していく取組みです。日本に先立ち、
米国や英国の土木学会は以前からこ
うした活動を進めており、その成果は
両国ですでに広く認知されています。
当学会でも、まずは道路部門を対象
として試行版の「健康診断書」を取り

まとめました。今年度はさらに河川や
下水道、来年度以降は港湾をはじめさ
まざまなインフラの診断結果を順次
公表していく予定です。

日本は、水道の水がそのまま飲み、
電車の運行は正確で、停電もめったに
ない世界有数の国です。それが、イン
フラの維持管理・更新を計画的に行
い、機能や性能を保っているおかげ
だということ国民に理解してもら
わなければなりません。このような理
解が広がれば、土木の仕事に魅力を感じ
る人たちも増えるはずです。この健
康診断書がそのきっかけになればと
思っています。

インフラはつくって終わりという
わけではありません。既存インフラの
確かな維持管理・更新を行うことも
に、建設段階でも長寿命化を考え、新
技術も加えながら、品質を高めてい
く。その過程には、私たち土木技術者
がやるべきことがいくつでもあるは
ずです。

——本日はありがとうございました。

【執筆】三上 美絵
【撮影】大村 拓也